

宮崎滔天全集

第四卷

宮崎滔天全集

第四卷

平凡社

宮崎滔天全集 第四卷

昭和四八年二月一六日 初版發行

編者 宮崎龍介
みやざきりゅうすけ

小野川秀美
おののかわひでみ

發行者 下中邦彦
しもむねくに

發行所 株式會社 平凡社
へいふん

東京都千代田區四番町四番地
郵便番號一〇二
電話 二六五〇四五一
振替 東京二九六三九

印刷 株式會社 共立社印刷所
製本 株式會社 石津製本所

凡例

一、本全集は宮崎滔天の著述、談話、筆談記録、書簡などを未発表のものをふくめて現在可能なかぎり蒐集し、これに若干の關係資料を附して編輯したものである。

二、原稿収録にあたり既発表のもので原稿の失われたものは、それがはじめて発表掲載されたときのものを底稿とし、『三十三年之夢』（第一卷所收）にはとくに異本相互のあいだの異同を校訂したが、その他の収録文にほどこした校訂、編註は本文中に「」内に8ポイント活字で表示した。

三、収録文は原稿、底稿に忠實であることを原則としたが、編集上、原文を次のように改めた。

- (イ) 必要に応じてルビを附し、新かなをもつて表記した。
- (ロ) 句讀點、改行、字下りなどの扱いは、讀解の便をはかつて通行の方式にしたがった。
- (ハ) 清音、濁音は通行の用法に改めた。
- (ニ) 文中の會話、引用文に「」をほどこした。
- (ホ) 書名、新聞名、雜誌名には『』を、その他の著作名には「」をほどこした。
- (ヘ) 變體かなは平かなに改めた。
- (ト) 圈點は原則として省いたが必要に応じて一部を残した。
- (チ) 白文の漢文、漢詩には必要に応じて句讀點、返り點を附した。

四、原文のかな遣い、送りがなは、歴史的用法、著者獨特の用法などが混用されているが、敢えて統一しなかつた。

五、明らかな誤字、誤記は改めたが、現在通行の用法では誤字、誤記に類する用法も文意が通ずるかぎりは敢えて改めなかった。

六、促音は原文のままとし、捨てがなを使用しなかった。

七、正誤を判断しかねる用語、用法にはママと傍記した。

八、人名などの固有名詞には著者の誤記と思われるものもあるが、あるいは著者の意識的な表記であるかも知れぬことを考慮して敢えて改めず、同一著述内で初出のさいに「」内に8ポイント活字で註記し、再出以降のものにはとくに註記しなかった。

九、原文不明の個所は、不明の字数だけ□で示した。

十、原文（ ）内の文章はすべて8ポイント活字にした。

十一、収録各文の発表時の署名、発表紙誌名、発表年月日は巻末の解題で解説を加えたが、また各中扉の裏にも附しておいた。

なお、本全集は滔天評價の素材を提供するという目的から、今日からすれば明らかな、中國あるいは朝鮮人などに對する蔑稱をそのまま直書している場合も、また未解放部落、國內の少數民族を蔑稱している場合も、これを一切あらためなかった。この方針は既刊の第一巻編集の方針でもあった。

本全集の編輯にあたっては資料の提供をはじめとしてつぎの機關の御協力を得た。記して厚く感謝の意を表する。國立國會圖書館、明治新聞雜誌文庫、早稻田大學圖書館、長崎縣立圖書館、西日本新聞社。

編集委員 宮崎 龍介

小野川秀美

目次

I 凡例

艦隊訪問……………七

乾坤鎔廬日抄……………九

桃中軒の近状……………罨

巡業雜録……………五

『太平天國戰史』題辭並題詩……………五

支那留學生に就て……………五

米國の今昔……………三

野滿俊太郎と弟留記……………三

伊藤絹代夫人を悼む	三〇
浪花節評	三六
浪花節と天理教	三七
關西九州巡業日誌	三九
「協同隊」に就て讀者諸君に謹告	四〇
熊本協同隊	四一
『近世名士譚』序	四二
よもや日記	四三
俠客と江戸ッ兒と浪花節	四四
洪疇和尚を憶ふ	四五
黃一歐消息	四六
浪人界の快男兒宮崎滔天君夢物語	四七
天草四郎	四八
金玉均先生を懷ふ	四九

宮崎滔天氏之談……………二六六

II

南北妥協問題に就て……………三三五

銷夏漫録……………三三〇

朝鮮のぞ記……………三二九

むだが記……………三七三

『みだれ箱』の中より……………三七六

韃園近況……………三九〇

帝劇見物……………三九四

近狀如件……………四〇〇

佐々木金次郎君を悼む……………四〇五

久方ぶりの記……………四〇七

故山田良政君建碑式……………四三三

旅中漫録……………四三七

參宮紀行

解説・解題

.....

四七

.....

四六

題
字
黃
興

宮崎滔天全集 第四卷

I

艦隊訪問『九州日報』明治三十一年六月二十三日。滔天

乾坤鏖廬日抄『二六新報』明治三十四年十月三十一日、十二月二十八日。雲介

桃中軒の近狀『二六新報』明治三十六年七月六日。

巡業雜錄『二六新報』明治三十六年七月十八日。桃中軒牛右衛門

『太平天國戰史』題辭並題詩『太平天國戰史』明治三十七年。白浪庵滔天

支那留學生に就て『革命評論』明治三十九年九月五日。無署名

米國の今昔『革命評論』明治三十九年十月五日。夢我

野滿俊太郎と弟留記『革命評論』明治三十九年十月二十日。夢我庵

伊藤絹代夫人を悼む『革命評論』明治三十九年十一月十日。滔天

浪花節評『日本及日本人』明治四十年一月十五日、四月一日。博浪庵

浪花節と天理教『日本及日本人』明治四十年七月十五日。巢鴨浪人

關西九州巡業日誌『めざまし新聞』明治四十一年九月、？。白浪庵滔天

「協同隊」に就て讀者諸君に謹告『熊本評論』明治四十年十一月二十日。宮崎滔天
熊本協同隊『熊本評論』明治四十年十一月五日〜四十一年六月五日。宮崎滔天編

『近世名士譚』序『近世名士譚』明治四十一年六月十五日。宮崎滔天

よもや日記『日本及日本人』明治四十二年八月一日〜十二月十五日。滔天

俠客と江戸ッ兒と浪花節『日本及日本人』明治四十四年一月一日。滔天

洪疇和尚を憶ふ『日本及日本人』明治四十四年十月一日。宮崎滔天

黄一歐消息(談)『東京日日新聞』明治四十四年十月十六日。

浪人界の快男兒宮崎滔天君夢物語『成功』明治四十五年一月一日。宮崎滔天

天草 四郎 未發表草稿。大正二年十一月十八日。

金玉均先生を懷ふ『金玉均』大正五年三月二十八日。宮崎滔天

宮崎滔天氏之談 長崎縣立圖書館藏、渡邊庫輔舊藏本。

艦隊訪問

昨日十時頃軍艦富士入港と先後して橋立亦入港仕候。本社にては今度は訪問の役前小生に下り申候間、直に車を飛せ警察の小蒸氣に便乗を乞ふて先づ橋立を訪問仕候。本艦は我が日本横須賀造船所にて製造したるものゝ由に御座候。三十年前に黒船など申て居たる者が今は已に我が手にて此の如く立派にこしらへ候事、實に驚く可き進歩に御座候。小生は此一事を以て殊に深く感謝を此軍艦に捧げ度候。

乗組將校の懇切なる案内にて一ト通各機械も參觀仕候。小生の如き素人には唯其巧妙に驚く而已に御座候。同艦には艦長以下將校二十五名、兵士五百名の乗組と承り申し、兵士の通常乗組は四百人の由に候得共、當時は新兵を乗組せ居ると申され候。

一般公衆參觀の日取りは未だ定まらざる由に候。何日間の滞留なるやも未だ命令を受けざれば、分明致さずとの事に候。本艦は唐津より此方に廻航したるものにて行先地も原より不分明の由に候。

富士は殘島のこしまと志賀との間にかゝつて小銃射的演習中にて參觀出來不申候。今日中には灣内に入り可申候。鎮遠も灣外にて演習致居候。今日中に集合の命有之居候由に候へば、無論是れも入灣可致候。已に八島、殿島も入灣致居ことに候間、明天目を刮かつて西望すれば五艘の帝國軍艦は山の如く龍の如き雄姿を以て諸君に對すべく候。小生等は斯の如き好機に於て成るべく多數公衆の參觀を許して、一般に國家的思想と海軍的智識を啓發するの機會を與へられんことを其筋にのぞむものに候。

昨日は知事代理として入佐書記官をはじめ、南礦山監督署長、三浦裁判署長、楯石警部長、山本檢事正、新納警察署

長、田中憲兵大尉の諸氏も橋立を訪問せられ申候。勿々。